心としての身体
―慣用表現から見た頭・腹・胸―

田　中　聰　子

1　はじめに

1．1　本稿の目的と背景

言語表現の意味を身体経験によって動機づける研究がこれまで認知言語学の分野で進められてきた．例えば Lakoff & Köecses（1987）は，英語の怒りを表す表現を分析して，「身体は怒りの容器」「怒りは容器内の液体」といった概念メタファーを抽出した．このように抽象的・精神的な概念が身体経験を通して捉えられる現象は'embodiment'（身体化）と呼ばれている．Sweetser（1990）の呼び方では，'mind as body'（身体としての精神）ということになる．

精神的な概念と身体的な概念との結びつきを「精神の身体化」として見ることは、まず精神を身体とは独立したものと捉え，そのように自立的に捉えられた精神が身体へとメタファー的に拡張するロジックを明らかにする立場であり，そこでは精神と身体を明確に分離して捉える思考のあり方が前提となっている．しかし，精神と身体との二元論的対立を背景に持たない日本語の分析には別のアプローチが必要であると思われる．

日本語でも身体語彙を核として構成される多くの慣用表現[注1]が精神作用を表すために用いられている．しかしそのような慣用表現から判断するかぎり，精神と身体をあくまで対立するものとして見るよりも，両者を一体化したイメージで捉える傾向があるように思われる．そうした日本語表現は，日本語の母語話者が抱いている身体についての文化モデル[注2]，いわば「心としての身体」モデルを反映している．

本稿は精神的な概念を身体概念の一側面として捉え，身体の下位部分と精神の下位概念との対応関係を探ることによってそれぞれの身体部分の文化モデルを明らかにすることを目的とする．

1．2　Matsuki の上昇モデル批判

日本語における身体と精神の関係を扱った先行研究に Matsuki（1995）がある．この論文は，英語における怒りの表現の分析にならって日本語における怒りの表現を分析し，日本語における怒りの表現を説明するモデルとして「怒りの上昇モデル」を提案している．このモデルによれば，怒りの感情はまず腹で発生し，抑制の試みがなされるが，怒りの強さが抑制力を上回ると腹から胸へと上昇する．そこでも抑制できない怒りは最終

的に頭にまで上昇するという．

同論文は，このモデルを立てる根拠として二つの怒りの表現を挙げている．その一つは「腹が立つ」である．同論文によれば，まず「腹が立つ」の「腹」は容器から内容物へのメトニミーによって怒りを表しており，次に「立つ」は英語の ’rise’ に対応する．その結果「腹が立つ」という表現は「怒り（腹）が発生する（立つ）」意味を表すことになる．また上昇モデルのもう一つの根拠として，「ついに頭に来た」という表現が挙げられている．すなわち，この中の「ついに」が最終段階を表しているところから，頭は上昇の最終段階つまり頂点に達した怒りの座であるという．

実際の言語事実に照らすとこの上昇モデルには問題がある．その一つは，次の例に見るように，日本語では怒りは腹だけでなく胸や頭でも発生するものとして捉えられる点である．

（１）a　あいつは女にこんな思いをさせて何とも思わないやつなのだと、今こそ胸底から怒りがわきあがってきた。（『女たちー』，31）

b　そう考えたときから、つい先刻まで岩戸に感じていた後ろめたさは、才次郎の胸の中で強引に貧乏籤（くじ）を押し付けてきた男への怒りに変わろうとしていた。（『椿山』、204）

（２）a　こういうバカな邦題にいきなり頭に来たのも、先週見てそれなりにいい気持ちになって帰ってきた「ビリー・エリオット」が、「リトル・ダンサー」という邦題で東京映画祭で上映されたというのを聞いたからだ。

（http://geocities.co.jp/Hollywood-Miyuki/2064/films/charliesangels.htm）

b　すると、なんと、ステッカーがありません。つまり、だれかが、ステッカーだけを盗んだに違いありません。その瞬間、もう猛烈に頭に来ました。

（http://www.susumu.com/ozisan/syuchow047.html）

もう一つの問題点は，頭，胸，腹へと上昇するにつれて怒りの強さが段階的に変わるわけではないということである．たとえば，頭，胸，腹とそれぞれ結びついた次のような怒りの表現を比べてみよう．

（３）　怒りがかれの胸のなかで荒れくるい息をつまらせた．（「死者の－」，468）

（４）　自分を裏切った弟子や妻の成功を見たり聞いたりするのは面白くなかっただろう．(...)それがのたれ死ぬどころか，テレビには出るわ，新聞のグラビアを飾るわと大活躍なのだから，腸（はらわた）の煮えくりかえる思いをしていたに違いない．

（『大蛇－』，76）

（５）　その翌朝，おれは矢ッ張り相当頭に来ていた．（『今昔－』，58）

上の例（３），（４）の胸や腹と結びついた怒りは，例（５）の頭と結びついた怒りと比べ，強さに劣るどころかむしろ勝っていると思われる．また例（５）のような程度副詞と「頭

に来る」との共起は，頭と結びついた怒りにも段階性があること，したがって必ずしも頂点に達した怒りばかりではないことを示している．Matsuki（1987）は，典型的な怒りを示す上昇モデルとは合致しない非典型的な場合もあることを認めてはいるが，上昇モデルに合致する表現が典型的で、合致しない表現が非典型的であると主張する根拠は示されていない．

ここで問題になるのは，日本語に反映された精神や身体についての文化モデル（民衆モデル）にほかならない．言語表現は，世界が客観的にどうあるかではなく，その言語を使用する人々の大多数が世界をどう捉えているかを反映しているからである．そのようなモデルを捉えるためには，感情や身体に関わる慣用表現をもう少し広く見渡し，その分布の様子を見る必要がある．本稿では，頭，胸および腹に対象を絞って，それぞれの「心としての身体」モデルを明らかにしたいと思う．身体部分のうちでもこの三つは特に精神作用と密接に結びつけて捉えられていると思われるからである．

１．３　心としての頭・胸・腹の概念

まず「心としての身体」という概念を提示する根拠として，ここで日本語の「心」という語の意味と「頭・胸・腹」の意味との関係について一言触れておきたい．「心」が表すのは，以下の例が示すように，まず精神作用の容器と言うべきものである．

（６）　特別なこと僕は何も言わなかったけど，僕の心の中に生まれてくる，いろんな思いを彼女も感じとってくれるのがよくわかったんだ．　（『むかー』，58）

ほかにも，「心を開く・閉ざす」，「心に秘める」など，精神作用の容器としての「心」の用法は多い．

その一方で「心」は，次の例に見るように，精神作用そのものを表すことがある．

（７）　心よりお礼を申し上げます．　（『夜叉沼ー』，130）

このほかにも，「心を読む・見抜く」，「本心を語る」など，精神作用そのものを表す「心」の用法も多い．

このように，「心」が表す概念は，精神作用の容器でもあり中身でもあるという二面性を持っている．

〈心〉概念の持つ容器および中身としての二面性は，身体語彙「頭・胸・腹」の意味にも現れている．まず次は容器としての「頭・胸・腹」の用法である．

（８）　頭の中では，考えるともなく考えていた．　（『棲家』，147）

（９）　言葉を交わさなくても，二人の胸の内には，同じ思いが澱んでいた．　（『暁天ー』，236）

（10）　でも，勤務時間を終えたあとは使用人といえども，自分の時間は自由に使っていいはずだ，それが民主主義ってものでしょ，と，私は腹の中で思っていた．

（『ふるえてー』，255）

この身体部分の容器メタファーは容器－内容物メトニミーを誘発する．まず，次の例が示すように，容器の内側の概念は中身―精神作用―の概念としばしば融合する．

（11）　この子の頭の中はさっぱりわからない．　（『女たちー』，159）

（12）　野上は愕然（がくぜん）としながらも，胸の内を表情にあらわさず，どこまでの話が里美に伝わってしまったのか探った．　（『金のー』，31）

（13）　父は自分で高い壁を作り，家族とでも腹の内を晒して話すことがない．

（『この国でー』，177）

さらに，次の例が示すように，身体部分そのものが容器の中身の概念と融合する．

（14）　酔っているので，頭がうまく回らない．　（『人質ー』，９）

（15）　ところがここへ来て，私はにわかに胸騒ぎに襲われていた．

（『理性ー』，354）

このように，身体部分を表す「頭・胸・腹」という語は，「心」と同様に精神作用の容器および中身を表すために用いられる．そこで，このような身体部分、またその統合としての身体を「心としての身体」と呼ぶことは妥当であると思われる．

２　慣用表現の分布から見た心としての頭・胸・腹

本節では，頭，胸，腹のいずれかを含み，全体として何らかの精神作用を表す慣用表現の分布状態を通して頭，胸，腹の「心としての身体」モデルを明らかにしていく．取り上げるのは,『日本語大辞典』（1989, 講談社）が見出しに掲げているものを基本とし，『国語慣用句辞典』（1977，東京堂出版），CD－ROM 版『広辞苑』，CD－ROM 版『大字泉』によって補足した「心としての頭，胸，腹」を表すと思われる表現のリストである．ただし「胸の関」や「腹悪し」のように現代日本語とは言いがたいものは除外した．

以下では便宜上，心をその知的側面と情緒的側面とに大きく二分し，どちらが相対的に顕著であるかによって，前者が顕著な場合を「思考」，後者が顕著な場合を「感情」と呼ぶことにする[注3]．実際にはその境界は曖昧であり，また多くの場合両者は混在するのであるが，ここであえて分類するのは，各身体部分を核とする概念の複合体（文化モデル）の特徴を明らかにし，それら相互の違いを示すためである．

２．１　慣用表現の分布から見た心としての頭

「頭」を含み精神作用を表す慣用表現を分類すると，次のような結果となる．

（Ｉ）　感情

【怒り】：頭に来る，頭に血がのぼる，頭から湯気を立てる

【怒りの抑制】：頭を冷やす

（Ⅱ） 感情を伴う思考

（ⅰ）【心配・不安を伴う思考】：頭が痛い／頭を痛める，頭を抱える

（ⅱ）【評価】頭が下がる，頭が上がらない

（Ⅲ） 思考

（ⅰ）【思考作用・記憶】：頭を使う，頭で理解する，頭をほぐす，頭をひねる，頭を絞る，頭を悩ます，頭にある，頭に浮ぶ，頭に入る／頭に入れる，頭の中が白くなる

（ⅱ）【思考能力】：頭がいい／悪い，頭が切れる，頭が鋭い，頭が鈍い／頭が鈍る，頭の回転が速い／遅い

（ⅲ）【思考のタイプ】：頭がかたい，頭が古い，頭でっかち

上の分布状況を見ると，「頭」と結びつけられるのは主として思考であり，感情としては【怒り】があるにすぎない．したがって慣用表現の分布から見た頭のモデルの特徴は，精神作用のうちでも特に知的・理性的な側面と結びつけて捉えられるということである．

この特徴を「頭」という語の実際の用例でも確かめておきたい．

（16） そう頭では理解しながらも，実際にまとまった規模の資金を組み入れることを，自分自身が納得して腹におさめられるだろうか．

http://www.aozora.gr.jp/shikumi.html

（17） 頭では解る，しかし胸では納得（なっとく）しない.....

http://www.aozora.gr.jp/cards/souseki/htmlfiles/meian/meian151_188.html

（18） 頭では静香も，緑子のとった行動が適切だったことは理解している．だが，感情が緑子を許せないのだろう． （『月神－』，30）

上の例が示すように，頭はしばしば胸及び腹と対立させて捉えられる．その場合，胸や腹は「納得」の概念，すなわち感情を重要な要素として含む理解の概念と結びつけられている．それに対して「頭」は，感情を排除した理性的な精神作用と結びつく傾向があると言える．

２．２ 慣用表現の分布から見た心としての胸

「胸」を含む精神化された意味を持つ表現を分類すると，次のような結果となる．

（Ⅰ） 感情

（ⅰ）【怒り】：胸が煮える，胸に据えかねる

【怒りの解消・抑制】：胸が癒える，胸をさする

（ⅱ）【悲しみ・悩み・不安・悔恨】：

胸が騒ぐ／胸騒ぎがする，胸が痛い（痛む）／胸を痛める，胸が張り裂ける，胸が（に）つかえる，胸が潰れる・胸を潰す，胸が塞が

る，胸がつまる，胸を冷やす，胸をえぐる，胸に応える，胸に余る，胸に納める，

【悩み・不安などの解除】：胸が晴れる／胸を晴らす，胸をなで下ろす

（iii）【喜び・感動・期待・憧れ】：

胸が熱くなる／胸を熱くする，胸が一杯になる，胸を打つ，胸に迫る，胸が躍る／胸を躍らせる，胸がとどろく／胸をとどろかせる，胸がときめく／胸をときめかせる，胸が弾む／胸を弾ませる，胸が膨らむ／胸を膨らませる，胸が焦がれる／胸を焦がす

（Ⅱ）感情を伴う記憶・思考

（ⅰ）【銘記・納得（理解）】：

胸に刻む，胸に畳む，胸に聞く，胸に手を置く，胸に当たる，胸に落ちる

（ii）【理解力・包容力】：胸が狭い，胸が広い

（iii）【意図・本音】：胸の内[注4]，胸に一物，胸を割る，胸に秘める

（iv）【評価】：胸が悪い／胸が悪くなる，胸がすく

ここでは慣用表現が（Ⅰ）の感情に集中している点が注目される．【悲しみ・悩み・不安・悔恨】といった暗い感情から【喜び・感動・期待・憧れ】といった明るい感情まで，きわめて広い範囲の感情が胸と結びついている．胸はすぐれて感情の座であると言うことができる．その中でも特に，【悲しみ】や【悩み】，【感動】や【憧れ】など他者の共感を呼びやすい感情と胸は結びついている．

共感を得やすい感情と結びつくという特徴を確認するために，（Ⅱ）－（iii）の「胸の内」を，これに対応する「腹の内」と比較してみよう．例えば，「察する・思いやる」のような共感を表す表現は「胸」とは容易に結びつくが「腹」とは結びつきにくい．実際，「胸の内を察する・思いやる」の方が「腹の内を察する・思いやる」よりもはるかに自然な表現である．共感可能性という点で中立的な「明かす・知る・読む・見抜く」などはどちらとも自然に共起するが，利己的・打算的な感情を表そうとする場合には「腹の内を探る」の方が「胸の内を探る」よりも適切に用いられる．またそうした事態を指す名詞的表現「腹の探り合い」があるのに「胸の探り合い」はない．ここから判断すれば，胸や腹と結びつく個人的感情のうち，胸と結びつく方はどちらかと言うと他人が共感しうるような感情であるのに対して，腹と結びつく方は他者との利害の対立を前提とした，いわば利己的・打算的な感情であると言える．

この傾向は次の実例でも観察される．

(19)　彼を守るつもりで広げた腕が，その歩みを妨げる枷になってはいないだろうか．常に<u>そんな不安が京介の胸にはあった</u>．　（『月蝕－』，192）

この場合，「胸」を「腹」に置き換えることには心理的な抵抗がある．それは，先行の文が示すように，ここで問題になる「不安」が相手への愛情に起因する感情であること，つまり自己保存の欲求の対極にある感情だからと考えるのが妥当であろう．

一方（Ⅱ）では，思考―心の知的側面―も深く関わっているのはもちろんであるが，ここに列挙したすべての表現において感情が中心を占めている点で，先に見た頭の場合とは異なっている．そのほか【意図・本音】については，次に見る腹と重なっており，しかも腹を含む表現の方が現代語としては一般的である．

２．３　慣用表現の分布から見た腹

「腹」を含み精神作用を表す慣用表現を分類すると，次のような結果となる．

（Ⅰ）感情

（ⅰ）【怒り】：腹が立つ／腹を立てる，腹が煮える（腸が煮えくりかえる），腹に据えかねる，腹（の虫）がおさまらない

【怒りの解消】：腹が癒える／腹を癒やす，腹が居る

（ⅱ）【笑いを生む感情】：腹がよじれる・腹（の筋）をよる，腹を抱える

（Ⅱ）感情を伴う思考

（ⅰ）【理解（納得）】：腹に落ちる（腑に落ちる）

（ⅱ）【理解力・包容力】：腹が大きい，腹が太い

（ⅲ）【意図・本音】：腹の内，腹に一物，腹を合わせる，腹を探る，腹を読む，腹を見抜く，腹を割る，腹を見られる，腹が黒い

（ⅳ）【決意・覚悟】：腹を固める，腹を決める，腹が据わる，腹ができる，腹を括る，腹を据える

まず腹と結びつく感情としては，（ⅰ）の【怒り】と（ⅲ）の【笑いを生む感情】がある．頭，胸，腹に共通する【怒り】は後でまとめて取り上げるのでこれを別にすると，腹の特徴を示すものとして残るのは【笑いを生む感情】である．上に挙げた慣用表現の表す笑いはごく素朴な感情、したがって共感可能な感情と言えるが，一般に腹と結びついた笑いは他者との利害の対立を含む感情となりやすい．辞書の見出しにはないがよく使われる「腹で笑う」という表現は，この種の笑いと腹との密接な結合を示している．

次に（Ⅱ）を見ると，まず（ⅲ）の【意図・本音】に多くの慣用表現が集中していることが注目される．そしてここに分類された各表現からは，我々の自己保存の欲求に根ざす感情，利害にからむ自他対立的・打算的な傾向が読み取れる．つまりここでも，自己保存の欲求に基づく感情と結びつきやすいという腹のモデルの特徴が確認できる．

この特徴は「腹」の実際の用例でも確かめられる．

(20)　京洛者は口では愛想が良いものの，腹では何を思うているかわからぬような不気味なところがある，と大坂者の五兵衛は京洛者を苦手としていた．

（『東洲ー』，101）

（21）　腹のうちはわかっているという思い入れで，石塚はじろりと二人をにらんだ.

（『ささやく河』，397）

（22）　聖大は，「まあ，いいスけどね」と答えながら，腹の中では，班長にあかんべえをしていた.　（『ボクの町』，496）

最初の二例の「腹」が表す思考・感情（思い）は，「腹」を「胸」に換えるとその打算的・自他対立的性格が弱められる．最後の例も，「腹の中」を「胸の中」にすると，「あかんべえ」をする主体の感情から挑発的な側面が失われ，自分を慰めようとする弱気な感情として理解されやすくなる.

しかし腹モデルにはもう一つの側面がある．それは分類（Ⅱ）の（ⅳ）【決意・覚悟】との結びつきである.【決意・覚悟】は，精神的動揺や気まぐれの対極にあり，存在に深く根ざした感情，「本気」あるいは「本音」と表現できるような感情の概念を含んでいる．上のリストにはないが「腹の底から」という表現が存在するのも，腹のこの側面を示すものと思われる.

以上から頭，胸，腹のモデルがある程度明らかになったと思われる．この三つの身体部分がすべて心に対応することから，頭，胸，腹のモデルは当然ながら重なり合っているが，心の持つ多様な側面のどれかと特に強く結びつくという傾向をそれぞれが持っている.

それぞれの特徴をまとめると，頭は理性的・論理的な精神作用（思考）と結びつく傾向があり，一方胸と腹はしばしば思考と対立させて捉えられる感情と結びつく傾向がある．胸と腹とを比較すると，悲しみや感動など共感を呼びやすい感情，また複雑で微妙な感情との結びつきが胸の特徴である一方，自己保存的な感情との結びつきが腹の特徴である．また腹は，精神の安定性・不動性と結びつけて捉えられるという特徴も持っている.

このような腹モデルの特徴は，身体部分としての腹の機能や性格と無関係であるとは思われない．腹は食物摂取という生命維持活動に直接関わる身体部分であり，同じく生命維持活動に関わる胸（心臓）よりも，日常生活の中で意識されやすい身体部分である．胸よりも腹に身体性の概念が顕著であり，また精神化される場合も，自己保存の欲求に基づいた利己的な感情が腹と結びつけられるのは，身体部分としての腹のそうした特徴の反映として理解できる．また別の面から見れば，生存にとって中心的な部分である腹は本音のありかとして捉えられるということにもなる．さらに，障害に立ち向かうとき，人が力を入れる部分が腹であることとも無関係ではないであろう.

3　頭・胸・腹のモデルと怒り

これまでの考察の過程で明らかになったように，怒りは頭，胸，腹に共通して結びつく感情である．したがって怒りについては特に考察する必要があると思われる．頭，胸，腹のモデルと怒りはどのような関わりを持っているのだろうか．

ここで取り上げるのは主として「むかつく」，「腹が立つ」，「頭に来る」である．この三つの表現は感情形容詞に近い性質を持つ．すなわち，主格補語を伴わず基本形で用いられて，原則として一人称にのみ適用され，発話時の話し手の内的状態を表すという性質である．

（23）　まったくあいつは，{むかつく・腹が立つ・頭に来る}.

これは，この三つが語彙的単位として高度に慣習化されていることを示している．したがってこの三つの表現は代表的な怒りの表現と言うことができよう．以下ではこれらの代表的な怒りの表現を中心として，上で見てきた胸，腹，頭の各モデルと怒りの関係を見ていく．

3．1　容器ないし中身の変化：胸と腹の場合

3．1．1　容器の中身の上昇：「むかつく」

「はじめに」で指摘したように，怒りが高まるにつれて腹から胸へ，胸からさらに頭へ上昇するというMatsukiの上昇モデルは言語事実から見て妥当ではない．しかしそれとは別に，ある種の上昇運動の概念が怒りに関わっていることも否定できない．それは，第一に胸が，ついで腹もまた，感情の容器として捉えられることに関わっている．感情は生成・消滅しまた増減する容器の中身として捉えられる．つまり感情の高まりはこの中身の体積の増大であり，容器内での高さの上昇を引き起こす．

胃の中にある物体が喉元を目指して上昇する現象を表す「むかつく」は，代表的な怒りの慣用表現の一つとなっている．

（24）　理不尽じゃないか．伸吾はちょっとムカついた．　（『ドリームー』，228）

類似の表現「むかむかする」もこれと一括して扱うことができる．「むかつく」あるいは「むかむかする」が結びつく身体部分としては胸がまず考えられる．しかし怒りの表現としては，次の例に見るように，腹とも結びついて用いられる．

（25）　笑って答えたが，ただでさえむかついている腹の中は，弾ける寸前だった．
（『女たちー』，85）

（26）　濡れた躰は相変わらず気持ちが悪かったし，ムカッ肚も収まってはいなかったのだけれど．　（『今昔ー』，11）

上の例（26）の怒りを表す名詞「ムカッ肚」は，「むかつく（むかむかする）腹」と分析

できる．

このように胸と腹とを区別することなく「むかつく」が用いられることは，容器内を上昇するものが食べ物のような物体ではなく怒りという精神的実体であり，容器としての胸や腹も身体という物体ではなく「心」によって表されるような実体として捉えられていることを示している．つまり胸・腹＝心ということである．

また怒りはしばしば「こみあげる」ものとして表される．

（27）　浅見はこみ上げる怒りを抑えきれずに，激しい勢いで受話器を置いた．

（『ユタが－』，208）

「こみあげる」も文字通りには身体内の物体が喉元へと上昇する現象であり，こうした表現もまた胸（あるいは腹）が上昇する怒りの（より広くは上昇する感情の）容器であることを示している．

以上に見てきたように，胸あるいは腹に関わる怒りの表現では怒りは容器内を（ただし局地的に）上昇する中身として捉えられている．胸および腹と怒りとのこのような結合のあり方は，感情の容器という側面を顕著に持つ胸（あるいは腹）のモデルに合致している．

３．１．２　容器の安定性の喪失：「腹が立つ」

「腹が立つ」も代表的な怒りの表現の一つである．Matsuki（1995）の「腹が立つ」の分析は，「腹」が怒りを表し，「立つ」がその感情の発生を表すというものである．しかしこの表現の構成要素である「腹」がそれ自体で怒りを表しているという主張は，この表現だけを見るかぎり裏付けようがない．これは主として，「立つ」を「発生する」とする解釈から演繹的に推論した「腹」の解釈であると思われる．

一方，感情の容器としての腹の捉え方が慣習的に確立していること，またその意味では容器と中身が融合する傾向があることは本稿で考察した通りである．ここからある程度の妥当性をもって言えるのは，腹が感情の容器または中身を表す可能性があるということであろう．

「腹が立つ」という表現は，現代語においては分析可能性[注5]がかなり低いと思われる．その一因として，意味においても形式においてもそれと対をなす「腹が居る」（怒りがおさまる）という表現が現代日本語（共通語）ではほとんど用いられないことが考えられる．それでもあえて「腹が立つ」を分析するとすれば，「腹が居る」との対比を考慮するべきであろう．動詞だけを異にする同じ構文で意味が反対になるとすれば，その意味の対立は動詞の意味に依存する可能性が高いからである．

「腹が居る」の「居る」は，古典的な意味としては座った状態をしている．そこで「腹が立つ」の「立つ」は座った姿勢から直立した姿勢への変化として解釈できる[注6]．重心の低い状態から高い状態への変化は安定性の低下をもたらす．つまり容器を立てること

は中身である感情が動揺することにつながる．

これと同様に，「腹に据えかねる」，「腹がおさまらない」[注7]という表現も，中身が容器の中に安定した状態で収納されていないことをもって怒りを表したものと言える．安定性を欠いた事態の代表的なケースの一つである怒りは，典型的には自己の利益が侵害されることへの自己保存的な反応である．「腹が立つ」などが平静さを失う状態のうち特に怒りを表すのは，主として自己保存的な感情に関与するという腹のモデルに合致していると言えよう．

以上に見てきたのは，感情の容器としての胸および腹のモデルと怒りの概念との関わりである．次項ではこれとは異なる頭の場合を見ていく．

３．２　怒りの身体的影響：頭の場合

３．２．１　身体的影響への言及：「頭に来る」

頭と関わる代表的な怒りの慣用表現に「頭に来る」がある．

(28)　センセイは写真機を気にしている．／もう頭に来た．／俺に対する気遣いはないものか．　（『今昔－』，39）

この場合の「来る」は，「疲れが目に来る・アルコールが足に来る」などの「来る」と同様に，病気などの影響が身体のどこかに顕著に現れることであると理解される．つまり「頭に来る」は，怒りが身体部分としての頭に影響を及ぼすことをもって怒りを表す表現と考えられる．ただこの表現では，怒りが及ぼす影響の具体的な内容は示されていない．そこで，頭に関わる他の怒りの表現も参照しておきたい．

３．２．２　血液の上昇

頭に関わる怒りの慣用表現に「頭に血が上る」がある．

(29)　さすがのディアも，それを聞いて頭に血が上った．／「あなた，いい加減なことをいわないでください．（略）」　（『神鷲－』下，281）

ここで上昇するのは血液であって怒りではない．したがって頭は怒りという中身が上昇する容器とは言えない．この表現もまた，怒りが身体部分・頭に及ぼす生理的影響を通じて怒りを表している．ただしその影響の具体的内容が頭への血液の集中として明示されている点が相違している．

３．２．３　血圧の上昇と血管の膨張

上の血液の上昇と切り離せない現象として血圧の上昇，血管の膨張がある．これもまた怒りの表現となる．

(30)　小父さんは追っかけて捜して、見つからなくて、怒って怒って血圧が上がってぶっ倒れて、脳溢血で死んじゃった。　（『今昔－』、367）

(31)　小父さんは頭の血管が切れるほど怒って――（略）　（『今昔－』，366）

かくして怒りと頭との関わりは，具体的には血液が頭に集中し、その結果頭の血管が膨張しついには切れるに至るという生理的影響を通じてのものであると言える．

このように異なる動機づけを持つ代表的な三つの怒りの表現も，慣用化が進むことによりそこに含まれている身体部分の概念が希薄化し，同じ事態を表すのに無差別に用いられるようになってきている．その一方で，それほど慣用化されていない怒りの表現では，各身体部分のモデルが生きている可能性がある．たとえば「憤り」や「義憤」のように正当性を持つ怒りは，腹より胸の方がなじみやすいと考えられる．しかしここではこの問題にこれ以上立ち入らない．

以上のように，本稿では腹，胸，頭の概念に関わる慣用表現を通して，それぞれの身体部分の文化モデルを見てきた。またそれぞれの身体部分の概念に関わる代表的な怒りの慣用表現においても，それらの身体部分がそれぞれのモデルに応じて怒りの概念と結びついていることを示した．胸や腹に関わる代表的な怒りの表現では，怒りは容器内を上昇する中身として，あるいは感情の容器の安定性の喪失として捉えられている。一方頭に関わる代表的な怒りの表現では，頭は怒りの影響を受ける身体部分であることによって怒りと結びついている[注8]．このことは，胸や腹のモデルには感情の容器としての側面が顕著であるのに対し，頭のモデルには，思考の容器としての特徴は顕著であっても感情の容器としての側面が希薄であることと対応している．

ここで取り上げた慣用表現のリストは決して完全なものではなく，少なからぬ表現がもれている可能性もある．そのすべてを扱うことはこの論文の範囲を超える．より包括的な身体の文化モデルの解明は今後の課題である．また他の言語における身体部分を含む慣用表現との比較を通して文化の違いに迫ることも今後の課題としたい．

注

1　慣用句あるいは成句と呼ばれるものについては，国広（1997：128），籾山（1997）に定義が示されているが，実際には慣用句とそうでないものとの区別は明確ではなく，また文化モデルの特徴づけという目的にはその厳密な区別は重要でないため，慣用化された表現をより広く表すために「慣用表現」という用語を用いることにする．

2　文化モデル（cultural model）とは，ある社会の成員に共有される文化特定的な認知スキーマであり，通常意識されることなく前提とされる世界についてのモデルであって，我々が世界を理解し世界と相互作用を行う上で大きな役割を果たす．一つの言語共同体の中でも複数のモデルがありうるが，言語に反映されるのは主として専門家でない一般の人々の共有する民衆モデル（folk model）であると思われる．Holland & Quinn（1987），Roy D’Andrade（1987）参照．

3　心理学における「感情」の定義としては，例えば濱ほか（2001：２）が，「感情（affection）と

は，広義には経験の情感的（affective）あるは情緒的（emotional）な面を表す総称的用語である」としている．これは，急激に生起消滅する強い感情である「情緒」，持続的に生じる弱い感情である「気分」，文化的価値に関わる「情操」などのより特定的な心的経験をひっくるめて表すものと言える．本稿では，言語が主として専門家ではない人々の一般通念としての民衆モデルを反映するという考え方に立ち，心的経験を常識的な意味での知的側面と情緒的側面に分類して考えるが，後者についてはほぼこの定義と重なり合うと思われる．

4　「胸の内」は，特定できない感情から意図を含む思考まで広い範囲の心的経験に適用され，その漠然とした内容のゆえに分類が困難であるが，ここではその最も顕著な側面である【意図・本音】に分類する．

5　Langacker（1987：292）によれば，’analizability’とは，’recognition of the contribution that each component makes to the composite conceptualization’　である。複合表現の意味（概念）には各成分の意味が程度の差はあれ含まれるが，全体の意味に対してその成分の意味の相対的顕著性が高ければそれだけ分析可能性が高いということになる．したがって分析可能性は程度の問題である．

6　馬場（2002）は，動詞「立つ」が通時的には発生を意味したと示唆した上で，「腹が立つ」の「立つ」を，「ある現象が生起していない状態から生起した状態になる」あるいは「目に見えない状態から知覚される状態になる」と解釈している．これは，「腹が立つ」が全体で怒りの発生を表すことから逆算した解釈であろうと思われる．しかし『角川古語大辞典』（1994）は，自動詞「立つ」の項に，「自然現象が出現または発生する」意味とともに，「物が水平または平面の状態から、垂直または立体の状態に移る」という意味をも掲げている．通時的根拠からは両方の意味が可能だとすれば，「腹」が単独で自然現象あるいは怒りという心的現象を表し，「立つ」がその発生を表すと主張するのは根拠が不十分だと思われる．

7　実際には「腹の虫がおさまらない」の形で使われることが多く，ほかにも「腹の虫が鳴く」など，「虫」も腹に関わる概念複合体―文化モデル―の一要素であると思われる．ただ「心としての」腹のモデルにとっては「虫」は特殊ケースと思われるので，ここでは取り上げない．

8　生理的影響による怒りとの結合は頭・胸・腹に共通して見られる．例えば，「頭から湯気を立てる」，「胸が煮える」，「腹が煮える・腸が煮えくりかえる」といった体温上昇による怒りの表現がそれである．ただ胸と腹は怒りの容器でもあるのに対し，頭ではもっぱら生理的影響を通して怒りと結合する点が異なっている．

参考文献

国広哲弥　1997　『理想の国語辞典』　大修館書店

濱治世・鈴木直人・濱保久　2001　『新心理学ライブラリ17　感情心理学への招待』　サイエンス社

馬場典子　2002　「「腹が立つ」の動機付けに関する一考察」『言葉と文化』（名古屋大学大学院・国際言語文化研究科）第３号　31－44頁

籾山洋介　1997　「慣用句の体系的分類―陰喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に―」『名古屋大学国語国文学』第80号　29－43頁

Kövecses, Zoltán 1986 *Metaphors of anger, pride and love.* John Benjamins Publishing Company.

Lakoff, George & Zoltán Kövecses 1987 The cognitive model of anger inherent in American English. In Holland & Quinn (eds.), *Cultural models in language and thought*, Cambridge University Presss, 195-221.

Matsuki, Keiko 1995 Metaphors of anger in Japanese. In Taylor & MacLaurey (eds.), Language and the Cognitive Construal of the world, Mouton de Gruyter, 137-151.

Quinn, Naomi & Dorothy Holland 1987 Culture and cognition, In Holland & Quinn (eds.), Cultural models in language and thought, Cambridge University Presss, 3-40.

Roy D'Andrade 1987 A folk model of the mind. In Holland & Quinn (eds.) *Cultural models in language and thought*, Cambridge University Presss, 112-148.

Sweetser, Eve E. 1990 *From Etympology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure.* Cambridge University Press.

引用例出典（引用順）

『女たちー』：篠田節子『女たちのジハード』，集英社文庫.
『椿山』：乙川優三郎『椿山』，文春文庫.
「死者のー」：大江健三郎「死者の奢り・飼育」，CD-ROM 版『新潮文庫100冊』
『大蛇ー』：今邑彩『大蛇伝説殺人事件』，光文社文庫.
『今昔ー』：京極夏彦『今昔続百鬼――雲』，講談社ノベルス.
『むかー』：室井滋『むかつくぜ！』，文春文庫.
『夜叉沼ー』：太田忠司『夜叉沼事件』，徳間文庫.
『棲家』：明野照葉『棲家』，ハルキ・ホラー文庫.
『暁天ー』：椹野みちる『暁天の星』，講談社ノベルス.
『ふるえてー』：結城信孝編『ふるえて眠れ』，ハルキ・ホラー文庫.
『金のー』：北側歩実『金のゆりかご』，集英社文庫.
『この国でー』：島崎今日子『この国で女であるということ』，教育史料出版界.
『人質ー』：宮部みゆき『人質カノン』，文春文庫.
『理性ー』：青山圭秀『理性のゆらぎ』，幻冬舎文庫.
『月神ー』：柴田よしき『月神の浅き夢』，角川文庫.
『月蝕ー』：篠田真由美『月蝕の窓』，講談社ノベルス.
『東洲ー』：松井今朝子『東洲しゃらくさし』，PHP 文庫.
『ささやく河』：藤沢修平『ささやく河』，新潮文庫.
『ボクの町』：乃南アサ『ボクの町』，新潮社文庫.
『ドリームー』：宮部みゆき『ドリームバスター』，徳間書店.
『ユタがー』：内田泰夫『ユタが愛した探偵』，徳間ノベルス.
『神鷲ー』下：深田祐介『神鷲商人』下巻，文春文庫.
（このほかインターネットからの引用例は本文中に表示）